

adults  
only

presented by  
**FREAKS**



# 絶頂 キガティン





絶対ガキヤ

presented by FREAKS



# ■もくじ■

• 内表紙

• もくじ

• ミナデ淫  
「オノメシン」

• DQ II  
「夕月」

• しびれくらげ  
「みけ」

• 犬に噛まれたと思って  
「すみい」

• ロトの剣  
「OYZ」

• イラスト  
「七麻皐月」

• おまけイラスト  
「オノメシン」

• ゲストコメント

• メンバーコメント

• おくづけ





淫・三ナデイン  
by オノメシン



どっ...  
どうしたの  
二人とも...!?

ホラ...魔王との  
決戦も間近だし...



そ...そんな  
イキナリ  
言われても  
...!



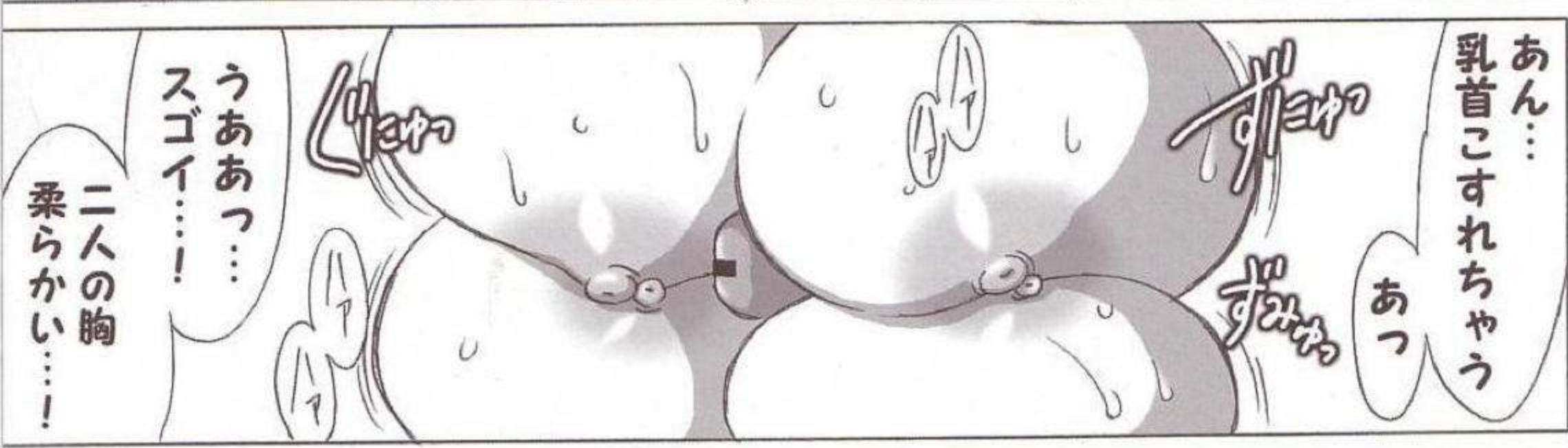
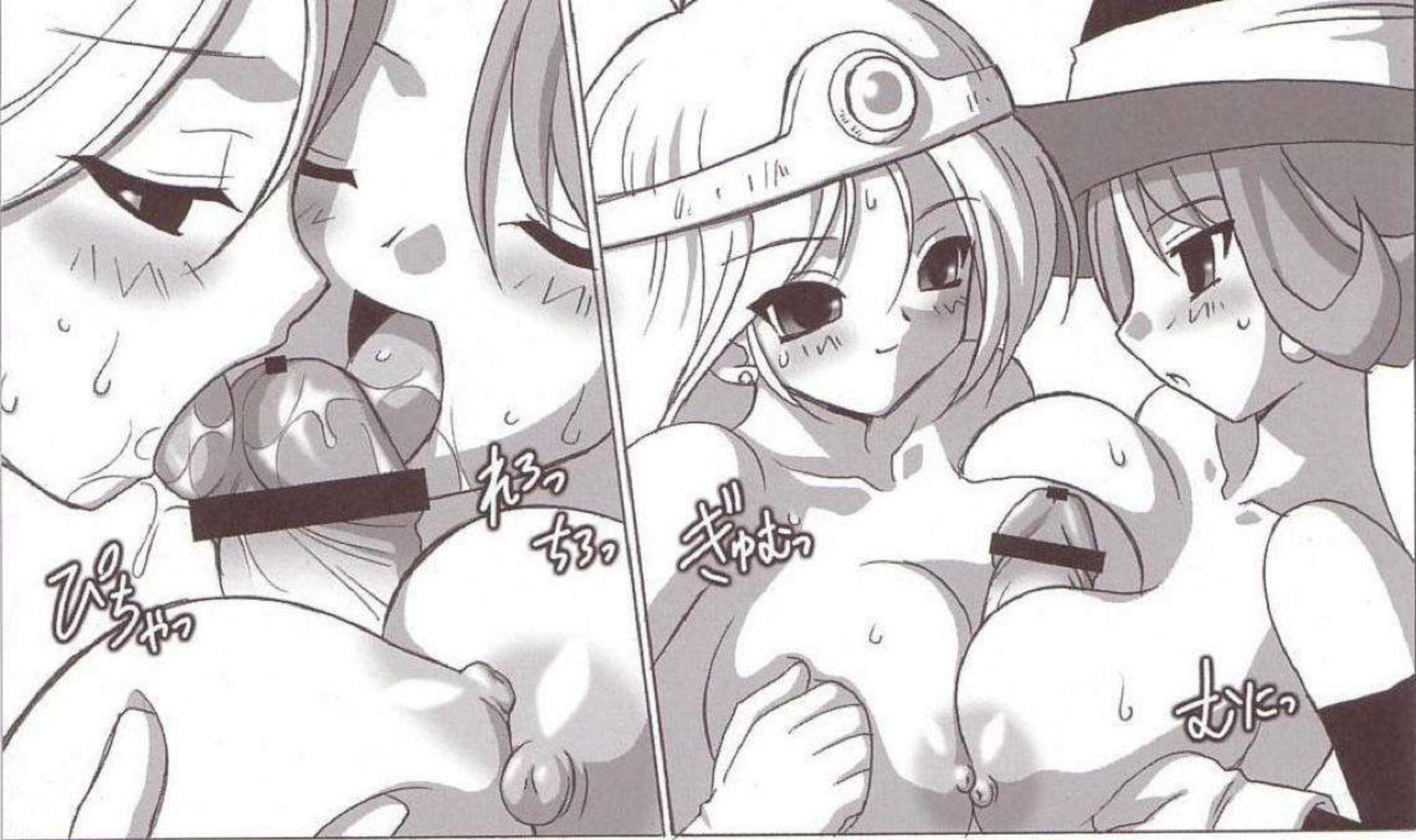
魔王と戦いになったら  
生きて帰れるかわからないし...  
だから今のうちに  
勇者の血筋を  
残しておかなきゃと  
思ってた...

ちんこ

















まずは

あなたからよ♡

あは



ぴゅん

ちゅぽ  
ちゅぽ

やっ...  
な...なに?



じゃ、じゃあ  
入れるよっ

うんっ

入れて...っ  
わたしの中に来てえ  
勇者様あ...

ちゅ...

ハア  
ハア



あはん!

ふああああっ  
ああん...!

ちゅぽ

あはん

入ってる...!  
一番奥まで  
入ってるう!

あ

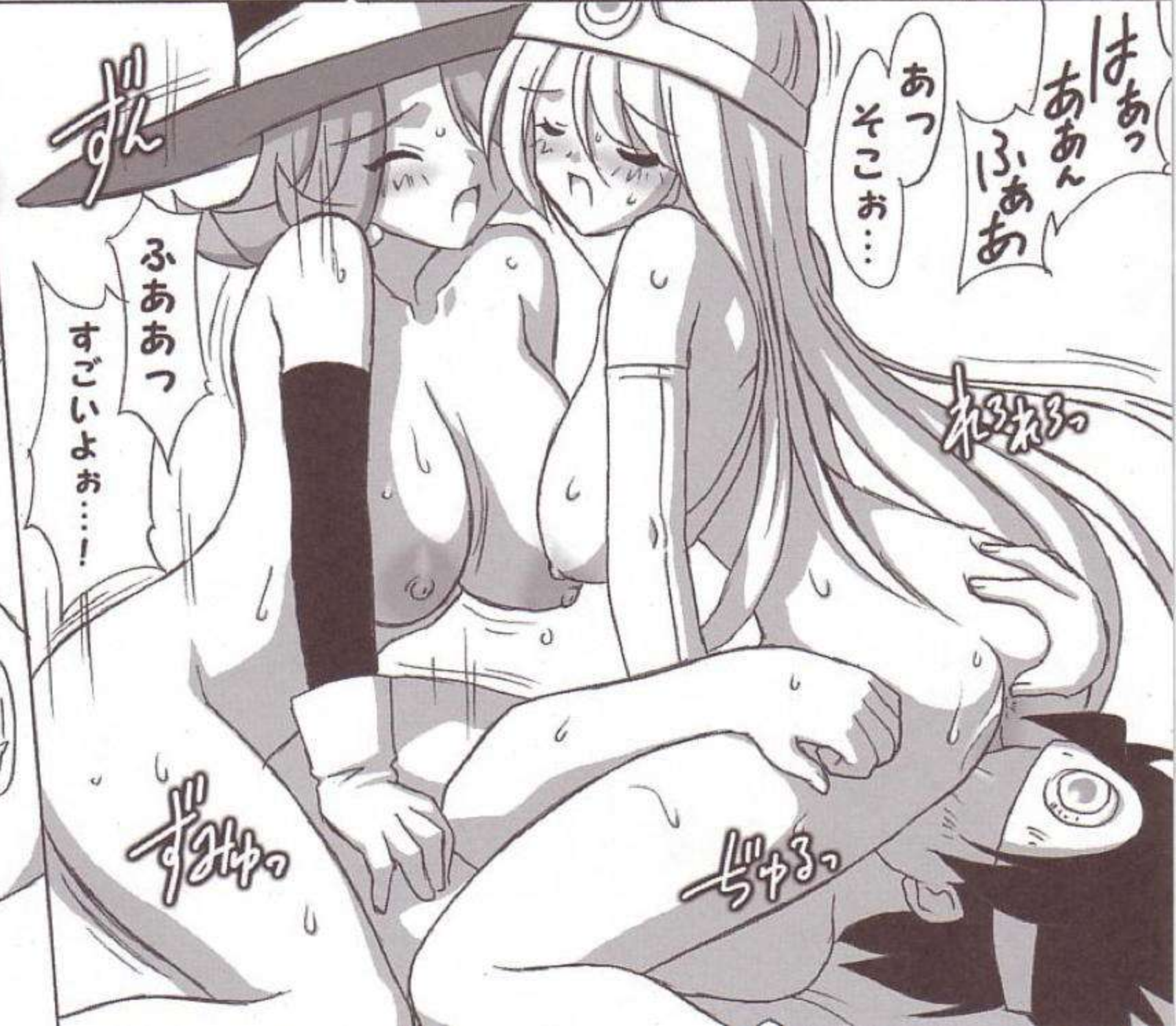


ちゅ...

つぎつぎ

うああっ!!  
入ってるう!!









はあん  
お○んこ  
もつとあ

ちやぽ

ちやぽ

ちやぽ

ちやぽ

ちやぽ

ちやぽ

ちやぽ

ちやぽ



うああっ…  
お尻  
だめえ

ちやぽ



あつダメ

イクうつ

…つちやう















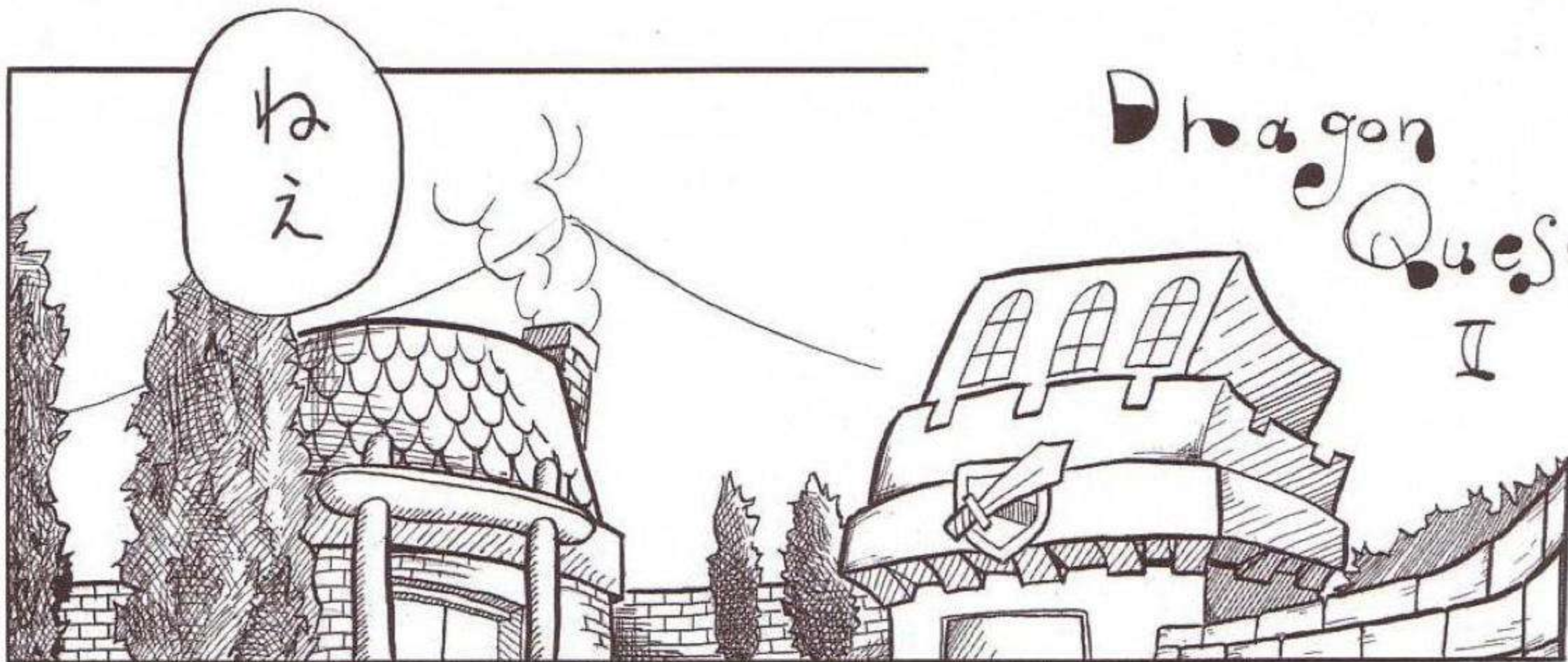








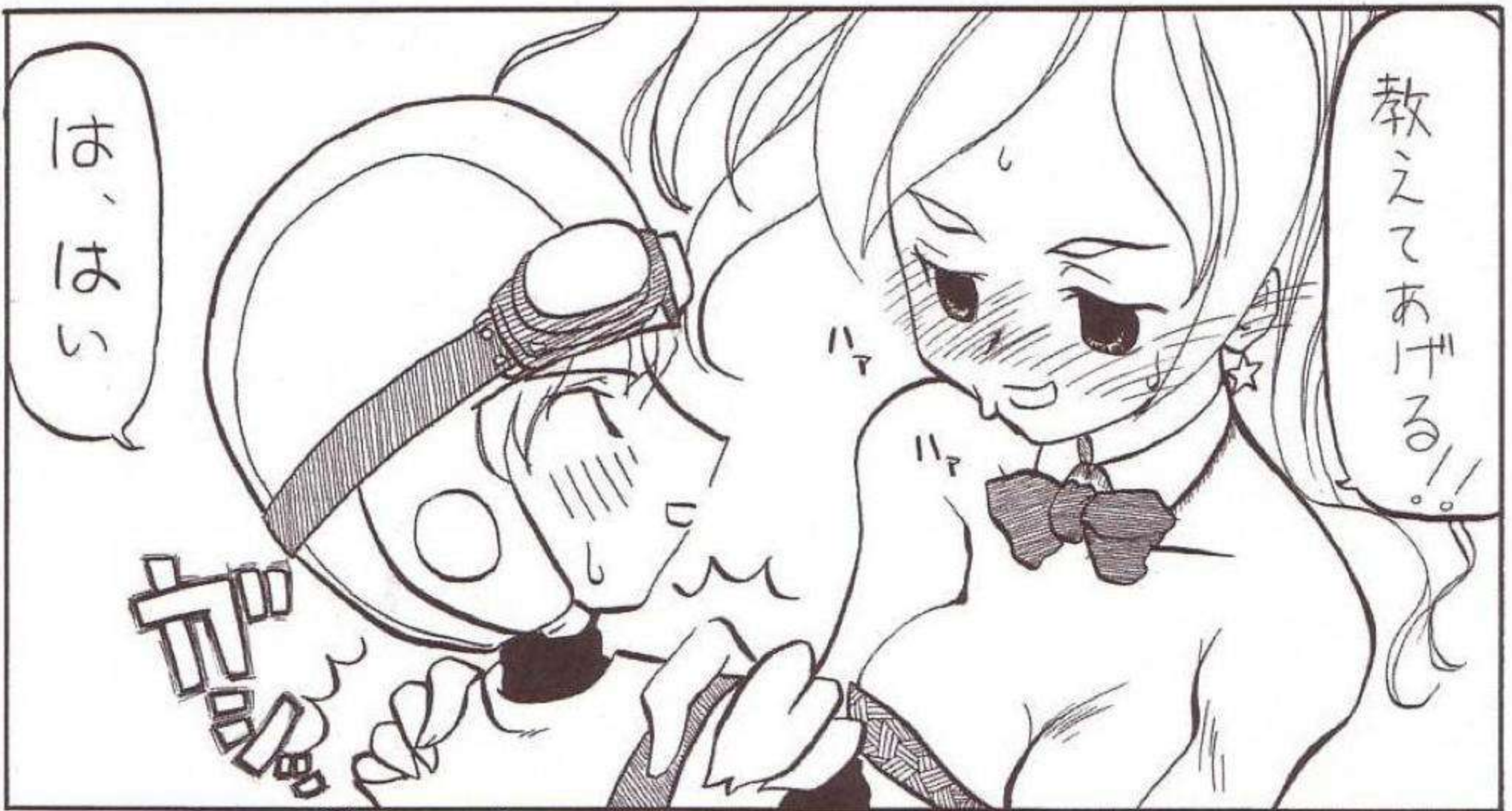
# Dragon Quest II



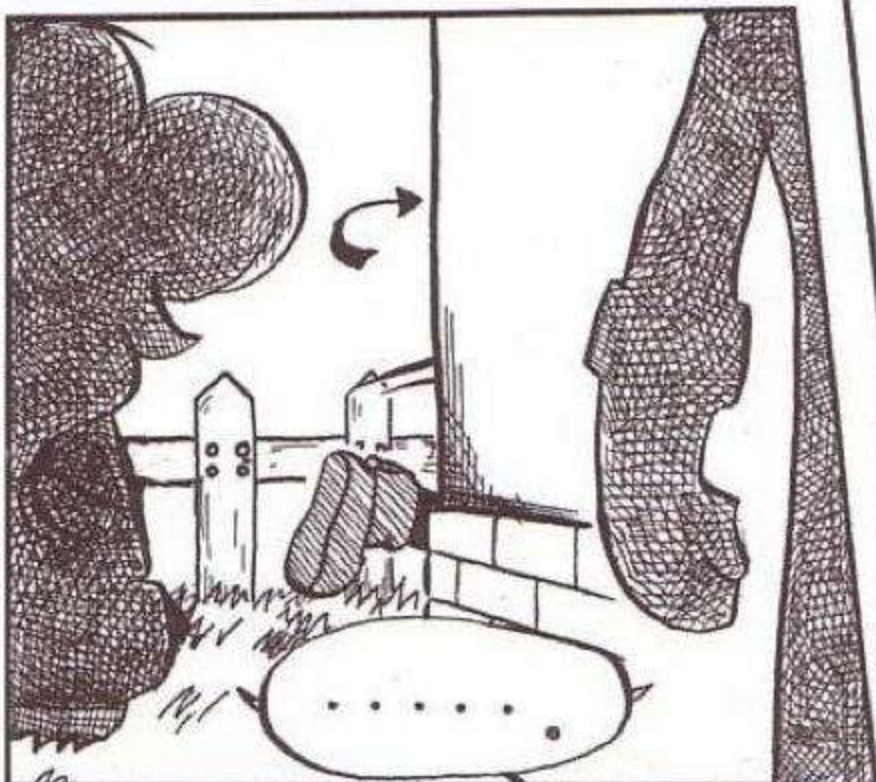
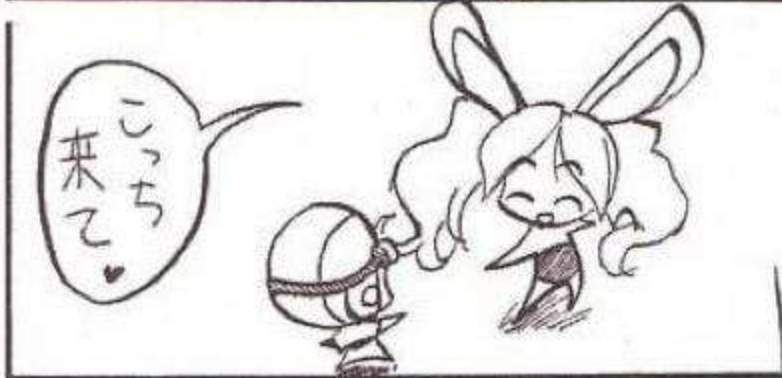








頼「カキ、カキ、カキ」



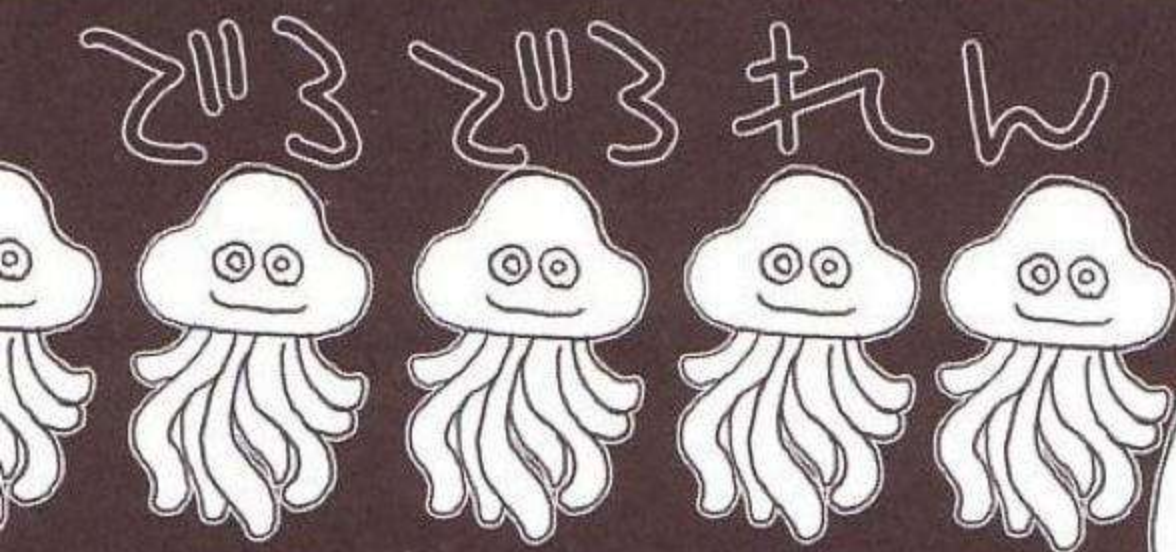






# ざぱ〜ん

■しびれくらげ■  
BY猫(みけ)



しびれくらげがあらわれた!!  
しびれくらげはいきなり襲い掛かってきた!



しびれくらげの触手攻撃！  
つうこんの一撃！  
筋肉弛緩剤&媚薬効果抜群だ！

にやるい

きやああああ！  
なにこれっ！きやう！  
体の自由が利かないっ

とわわ

とく

やっ駄目っ  
何するんだよっ  
やめるっ

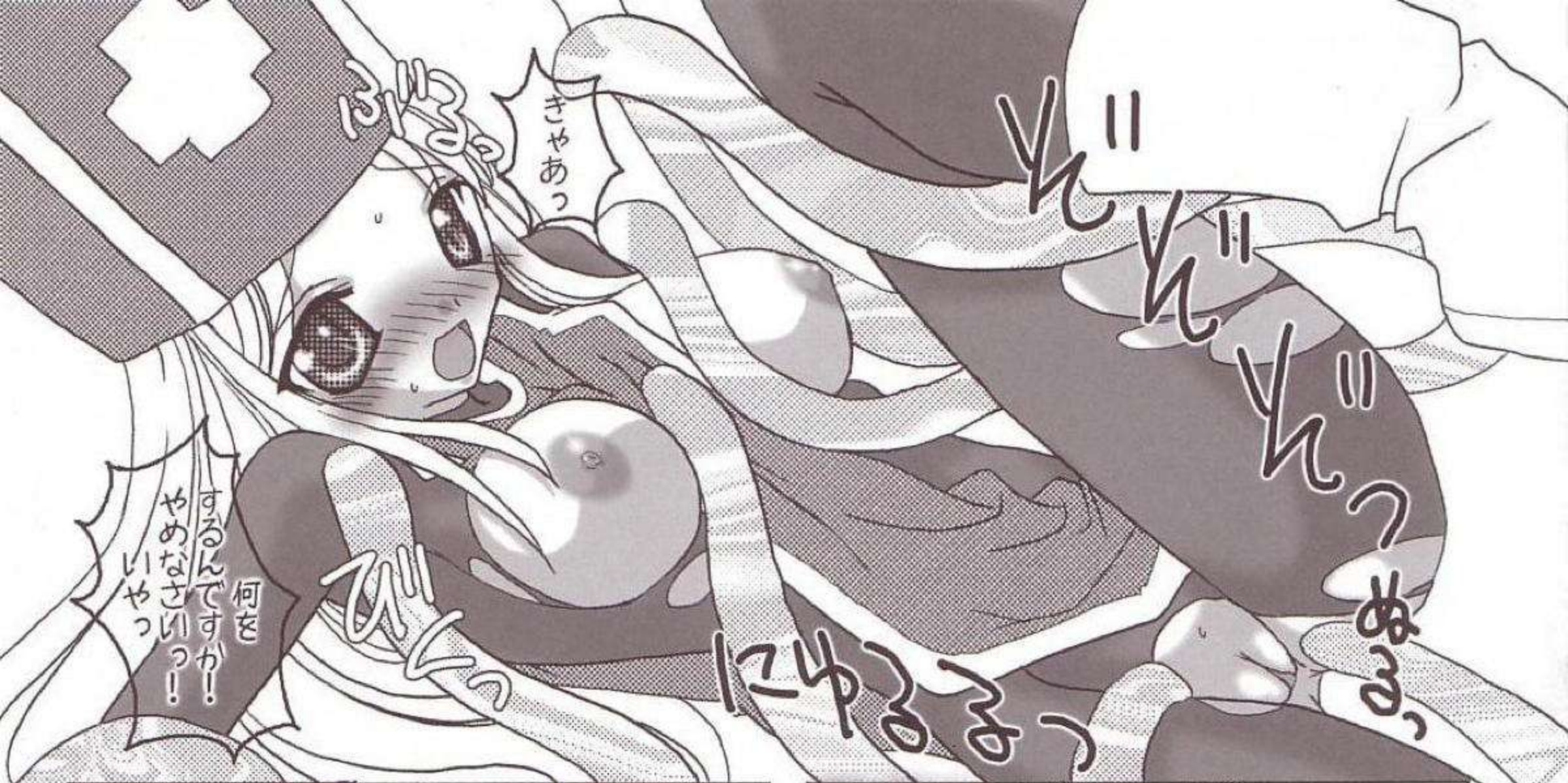
きやっ  
何するのよ！  
放せえ！

おん

にやるる

いやっ！  
体を触らないでっ  
気持ち悪いですっ！





何を  
するんですか!  
ちめなさいっ!  
いやっ

ぎゃあっ

びん

びん

びん

びん

びん

びん



ああっーそんな所っ  
くうっ体がしびれて  
思うようにいかなっ  
ぎゃあっ!

びん

びん



っ何をっ!  
いやっやめてっ

びん

びん

びん

びん



ああ  
うソでしょ  
やめて...  
お願い...

びん

びん

びん

びん

びん



びん





あっあっ  
あああ

はっはっ

ズズズ



ぷいっ  
あいつ

どんどん

はっはっ



すっすっ

んむうっ

ひんひん  
ちゅちゅ

はっはっ



ズズズ

すっすっ

あああああっひゃあん！  
入ってきますうっ  
ああっいやあああっ！  
んああっ！あっ！

はっはっ

はっはっ





こんな事してっ  
後で覚えてなよっ  
うわっ・・・ああっ！

ああっ  
何するんだっ  
やめろっ！



んんん  
んんん  
んんん



んぐっ！



ああっ



んぐっひやふっ  
ほっはっーちめえっ！  
んむっーんあっ！

んむっうっ  
んはあっ！







あっあっあああああああ  
後ろにっ入ってるよおお!  
ひうっダメツイタイっああっ  
そっんなっ敷しくっんああっ!

びくびくびく



んぐっんんんっ  
んあっんあっ!んん!  
ほっはっひやらっん!っ!



ああっあんっ  
ひやああっあんっ

ダメエツ  
ダメだよおお  
あああっ

びく







いちゃっあつ  
やめてっばあ  
ああっやっ!



きやっ!  
何するのっあつ  
やめてよっ!



きやんっいやああん  
恥ずかしいっ・・・  
下着おろさないでえっ  
ダメッああっ!



ひやうっ  
ああっダメ!

そんな「  
いじらないでっ  
あんっあっ



あっ





あっあっあっあっ!  
入ってるっ! あんっ  
入っちゃってるっ

んああああ! んあ!  
そんなにっ 敷しくっ  
あっあっ! ふああ!  
擦れてるよっ! あ!

ぬるっ

あっあっあっあっ!

すっすっ



ああああ! あんっ  
アツイいいんむっ!

かっかっ

すっすっ

すっすっ

んんんん!  
んむっ! んふっんっ  
んんっんん!



んああああ! ぷああっ!  
でてるっでてるよ おおっ  
あああっ ああんっ あっあー!

あっあっ



すっすっ

あっあっ





あああああっあああっ  
そんないキナリっ  
やあああっあああっあっ



きやあ!  
何するのよっ  
いやっやああっ!!



んむー!!  
んっんっんふああっ  
んふっんふっんんっ!!

んあああっ  
んあっんむくっ  
んふっ!!



んふっふっふっ  
あふっあふっ  
んあふうんっ

んあっんんんんん  
むっんんんんん  
んっあっ  
んっ!

出てるっでてるうう  
中でええ! あああっんあっ  
だめっだめええ! イツちや!  
イツちやうううう! ああああ!

あああっんあああ  
おかしくなっちやうう  
あっあっあああ  
アツイイイ! あっ!





あああっあああああっ!  
イツちやううっ!  
イクウウー!あっああっ!







あー！  
ボクもうっ！  
ダメー！

っ！女勇者ーあっ！  
駄目っちよっごまってっ

ガッ

グン

ガッ

ガッ

ガッ

ガッ



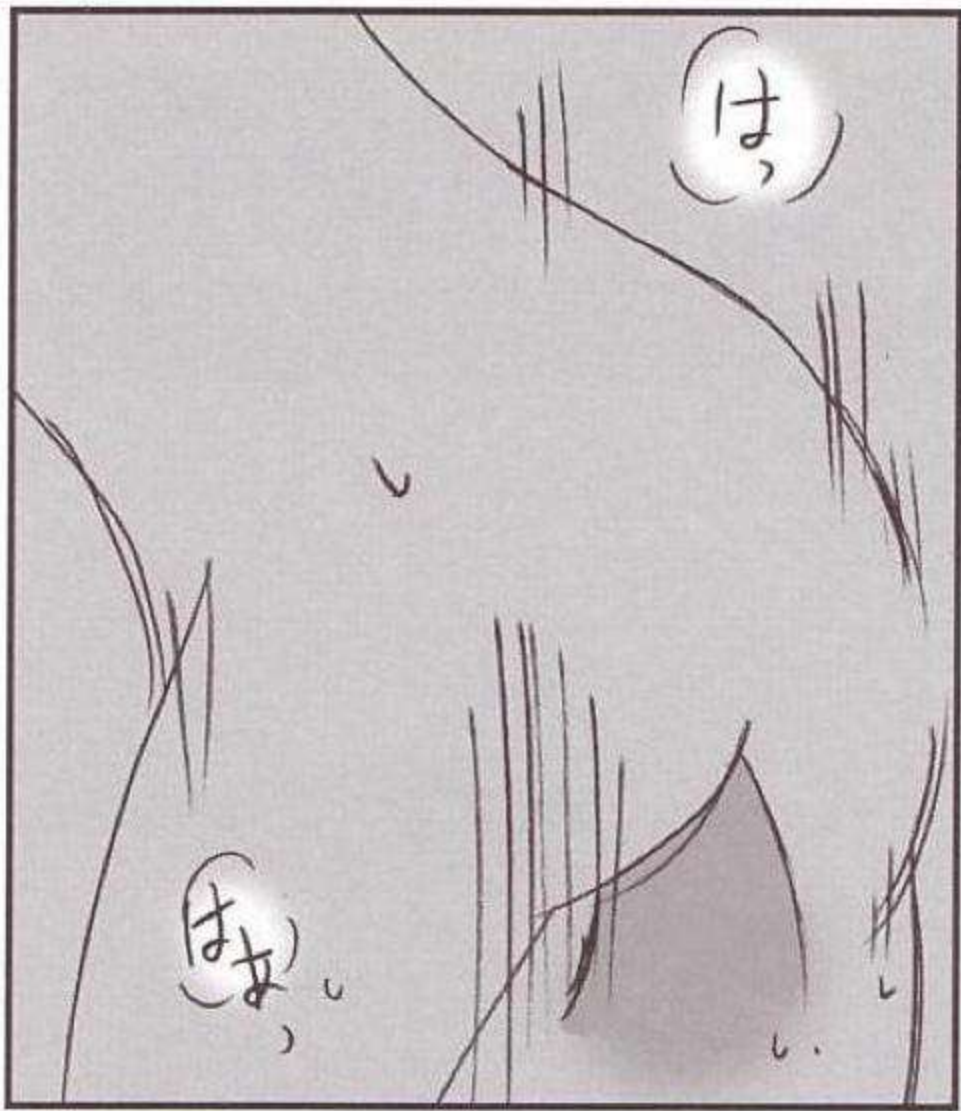
これだしてはわた。  
組まない？

ごめーん  
やっちやったっ

…女勇者あ…

みおし。





ある日  
朝起きたら





武道家さんが上に乗ってました。



犬に噛まれたと思って。

SUMI



あ、起きた。  
オハヨー！

ほっさ  
ほっさ

な  
な

なっっ

なにひてるんれすか……！

何って

せっく……んぐ

ほっさ

モロかです

あ  
あ  
あ  
あ





ちよつと調子乗って  
動きすぎたわ…



もー

うる  
わいっ



…よし元通りっ

アタ

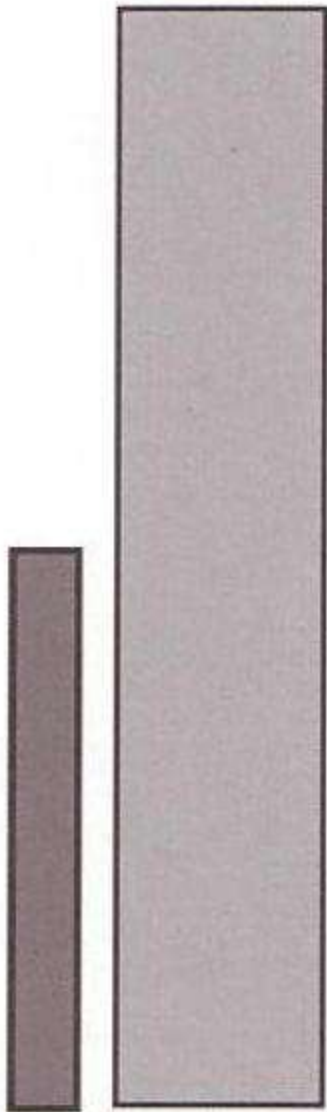


小ぢうじと  
気にしすぎなのよね

頭でっかちだと  
身体に悪いわよ…と

萎えてるし。









よ



おっは



朝。



そかー

じゃあ今日も張り切って  
行きますっかー!



ヴッ

ううん何でも無い...

...あれ。  
どしたの  
顔青いよ。



へんじがない。  
ただのしかばねのようだ...



完



## ロトの剣

文・OYZ

緑・猫(みけ)

光が闇を駆逐する。

女勇者の差し出した光の玉が、ゾーマを守る闇を吹き飛ばす。

「オルテガの息子が相手になる」

光の玉を無造作に床に置いて、剣を抜く。

光の玉に負けない光を放つその剣は、オリハルコンでできた、王者の剣。その柄には、どす黒く汚れた固い布が巻きつけてある。

(父さん、力を貸して)

あえて、息子を名乗った女勇者は、柄に巻きつけた布に口付けをすると、剣を天に突き刺すように構えた。左足を一歩前に踏み出して、いつでも斬りかかれる体勢を取る。

その横には、似たように剣を構える戦士の姿。

後ろには、呪文を唱える魔法使いと僧侶。

世界の命運を決める戦いが始まった。

戦いの結果は、世界中誰もが知っている。

勇者たちは勝った。

世界を救った。

それから、どうしたのか、女勇者は良く覚えていない。

「お前にロトの称号を与える。これからは勇者ロトを名乗るがよい」

「お父さんは、もう帰らないのね。あなたが変わりに生きていくのよ」

「もう、女に戻ってもいいんじゃないか？」

色々あったように思う。

ただ、父親を助けられなかったことが、彼女の心に重くのしかかっていた。

気が付くと、いつもゾーマを倒した剣を抱いていた。

彼女にはオルテガが最後に残した物として、オルテガの使っていた斧の柄を拾っていた。オリハルコンで剣を作る際、この柄を流用していた。剣を鍛えたのは、ジパングの間だ。ジパング特有の刀の造りは、柄と刀身が別々に作られるものなのだ。

斧の柄を、そのまま使うわけには行かなかったが、何とか使い、滑り止めとして使われていた布を巻きつけて完成させたものだ。

彼女が、もっとも、オルテガの匂いを感じることもできるものだった。

父親には憧れがあった。

彼女が幼い頃から国中に慕われた勇者。

敵しく、優しく、色々教えてくれた。

肉体関係があったわけじゃない。

だが、年頃の女の子の憧れが、対象を失って捻じ曲がってしまったとしても、誰が

責められるだろうか。

気が付くと彼女はいつも、剣を抱いていた。

今は勇者の格好をしていない。それでも、男として育てられた名残で、格好は男の格好だ。シャツにズボン。色気も何もない格好だ。

ベッドの上に胡坐をかいて、組んだ左足の太ももの上に乗せて横に剣を倒すように置いた。柄の部分が、自分の顔の前に来るようにして、剣の柄に、何度も何度も唇をつけた。

オルテガの斧として使われていたときには、彼女の腕よりもはるかに太いものだったが、王者の剣の柄として作り直されるときに彼女の手に合うように細く削られている。細く削った柄に、使い込まれてぼろぼろになっている布を巻きつけていた。

父親の匂い。

本当にそんな匂いがするのかわからない。

それでも、彼女は、その柄に父親を感じていた。

柄に唇をつける好意が、だんだんと激しくなってきた。唇を付けるだけでは飽き足らず、舌を出して、舐め始めた。

けっして綺麗なものではない。普通の人間が舌で舐めたら、その気落ち悪さで吐きそうになるような匂いがしている。だが、女勇者には気にならない。気にならないほどの想いがあり、思い込みがあった。

舌を絡めて、剣の柄を唾液で濡らしていく。

舌を突き出して、ゆっくりと、隅から隅まで舐めていく。

もう、何度もした行為だ。

最初は突き出した舌でゆっくりと舐めるだけだった。それがだんだんと興奮してきた。開いた唇を押し当て、舌を柄に押し付けるようになってきた。

いやらしい光沢が柄を包んでいく。

それはもう、剣の柄などではなく、女を責める棒に変わっていた。

女勇者は、胡坐をかいた足の上に剣を横たえろと服を脱いだ。鍛えられた体は、それでも女の子らしい起伏を持っている。はりのある肌が、二つの胸を、その先についている固く尖った突起を、上に向けている。

寝転がって、剣を胸の間に置いた。ズボンも脱ぐ。

身に何もまとっていない。

剣が、彼女の横たわった体の上にあった。

それに、彼女は抱きつく。

不安になるほど細く、身長に比べればかなり短い棒だ。腕を回し、足を絡めても、安心感を得られるとは到底思えない。

それでも、彼女はがすがるものはそれしかなかった。

棒に抱きついて、柄の底に唇をつける。足の付け根を、鞘に押し当て、こすりつける。

それだけで、のどの奥から、体がとろけるような声が漏れた。

しっかりと扉を閉めた部屋からも、外に漏れ出すような大きな声だ。自然と出てくる声を止めることができない。いや、抑えようという考えすら思いつかなかった。

しばらく、剣の質量を感じていた。

息が荒くなって、耐えられなくなってきたことを示す。

我慢できなくなってきた。足の付け根に鞘を当てたまま、ゆっくりと剣をずらして



いった。体の中心に置いていた剣が、足のほうに下げられていく。曲げた足を少しだけ左右に広げ、腰を浮かす。鞘の装飾の凹凸が、一番敏感な部分をもどかしげにこすっていく。

柄を胸に押し付けて、その感触を確かめた。

尖った先端に押し当てると、剣がまるで生きた体温を持っているように思える。腰を支えている足が、耐え切れずに震える。

剣が体を降りていく。

切っ先がベッドに付く。

腰はいよいよ上がって、二つの足と肩と頭で体を支えているような形になっている。体はこれ以上ないくらい反っている。剣の柄を足の付け根に当てた。そこはもう熱く濡れて、太ももまで濡らしている。軽く触れただけで、いやらしい液体の音がする。

ゆっくりと、剣の柄を、自分の中に沈めていった。

滑り止めのためにつけられた、柄の終端の出っ張り、男の物の出っ張りと同じようになっている。それが、彼女の肉を押し広げながら入っていく。

太く硬いそれが入ってくる感触に、彼女の足は耐えられなくなっていた。

じらしていたこともあって、剣は滑り込むように飲み込まれていった。

奥まで届いた。

これ以上ないところから、さらに体を反らした。

それは一瞬だけ。

次の瞬間、体中から力が抜けた。絶頂を迎えてしまったのである。力が抜けたのは、一瞬だったかもしれないが、それでも、体を支えていることはできなくなっていた。

足から力が抜け、お尻が下がる。

体を反っていたので、お尻を下げるとその分、ベッドの下のほうにずれていく。剣もそれに押されて下のほうにずれていく。しかし、布団に引っかかって、剣がずれていくのが途中から遅くなっていった。体がずれていくのはそれでも止まらないう。

「あああはあああ」

奥に当たっていたものがさらに押された。ただでさえ、敏感になっている体にその衝撃は強すぎた。立て続けに昇りつめた。

それでも、足らないのか、腰を振って、刺激を求める。

それは、彼女が動けなくなるまで続いた。

毎日のようにそれが続いた。

ある日。

女勇者が忽然と姿を消した。

しばらくして、教会に運ばれてきた。

何者かにこっぴどくやられたのだ。

しかし、このことはほとんど公にならなかった。

世界中に公になったのは、女勇者が花婿を募集。

そんな話題だった。

誰かに、何かに負けたことで、勇者を引退するのではないかと噂も、それに付いてまわった。女勇者の花婿になること、すなわちそれは、実質勇者になれる、というように等しかった。勇者の名声も、何もかもが手に入る。そう勘違いする者が多く

いても不思議ではなかった。

だが、誰でもなれるわけではない。

いくつかの条件があった。その条件を満たしているかを図るために、いくつかの試験があった。

その試験の一つ目が、女勇者と対等に戦えることだった。勝たなくていい。何分か、女勇者と戦って、無傷でいられればいい。戦いには僧侶が付き添い、傷ついても、もし仮に死んだとしても治してくれる。

その戦いは、毎日10も20も女戦士自らが相手をして決めるといふ。それだけでも、十分に女戦士が不利な条件だ。

もしかしら、なんとかなるのでは。

そういう思いからか、全国から腕自慢が集まってきた。

ゾーマを倒してから、女勇者がみなの前に顔を出すのは、ほとんど初めてと言って良かった。それだけに大騒ぎになっている。記念に戦ってみよう、とか、一目見ようという人間もいる。

希望すれば、女勇者はその全と戦った。

しかし。

ほとんどお祭り騒ぎのこの戦い。いや、大会と言ってよかった。町に集まった人間は残らず見に来ていたと言っても過言ではない。

観客が取り囲む石畳の台の上で、彼女は戦った。仮にもゾーマを倒したパーティのリーダーである。そう簡単に女勇者と立ち会える人間がいなかった。

人々は、女勇者の立ち回りに沸いた。

結局、一次試験の突破者は一人もいなかった。

「入るぞ」

落ち込んだ女勇者のもとに現れたのは、ゾーマを倒した仲間三人だ。戦士、魔法使い、僧侶。魔法使いが女で、他の二人は男だ。

女勇者は、自分のベッドの隅で体習すわりをして、毛布をマントのようにかぶっていた。うなだれた首を、一瞬だけ三人のほうに向けた。再びうなだれる。

「どうしたんだ？ 何をたくらんでいる？」

ゾーマを倒す旅の途中でも、女勇者の機転で色々な危機を乗り越えた。今回も、何かの目的で、何かの策に違いないと、三人は思っているようだ。

「協力者が必要なの」

弱々しく彼女は言った。

「協力者？ 仲間なら僕らで十分じゃないのかね？ 特に強い男というだけなら、戦士がいる」

僧侶は少しあきれた声で言った。

戦士は僧侶と目を合わせないように首をひねった。引き合いに出されても困る、そう言いたげだ。

「本当に花婿さんを探してたわけ？」

魔法使いは少し軽い口調で言った。言ってる本人も信じていない、そういう口調。案の定、勇者も首を横に振った。

「じゃあ、なんなのさ」



三人は、勇者の答えを待った。  
勇者は立ち上がった。  
三人を見る。

目には涙があふれている。

「何でもするから、私の言うこと聞いてくれる？」

彼女は少し前、教会に運び込まれる前、一人で旅に出ていた。

それはある噂を聞いたからだ。

神竜である。

この神竜を倒せば、一つだけ、どんなことでも願いが叶うという。

その願いを、彼女はオルテガを生き返らせることに使おうと考えていた。

しかし、一人で相手にするには、この神竜、強すぎた。

ゾーマなどよりよほど強いのである。

女勇者は、破れ、教会に運び込まれた。

そこで悟ったのである。

仲間、それも、自分の言うことを絶対としてくれる人間が必要なのだ。

神竜を倒すのに力を貸してくれる仲間、そして、自分の願いを優先してくれる人間

が必要だ。

それを探そうと、花婿募集などという企画を考えたのだった。

「あきれた」

話を聞いて真っ先に口を開いたのは、魔法使いだった。

魔法使いは、ベッドに体を投げ出すようにして座った。

「全くだ」

戦士は腕を組んで、足を広げた。

僧侶も大きめのため息をついた。

「まず、我々に話すべきだったね」

「俺たちを信用しろ」

女勇者は、うなだれた首を少しだけ持ち上げて、また落とす。うなずいているつもり

りのようだ。

「ごめん」

つぶやく。

「で、どうする？ 再戦するなら手伝うぜ？」

「そうですね。そろそろ、人々の懺悔を聞くのにも飽きました」

「あら、神に仕える人がそんなこと言っていていいの？」

「いいんだ」

たわいもない話。

それで、少しだけ、気がまぎれた。

女勇者は、笑った。

「じゃあ、神竜退治、協力してくれる？」

女勇者は、剣を抜いた。

その瞬間。

部屋の空気が変わった。

ゾーマを倒したその剣は、オリハルコンでできていた。この金属は普通の金属とは違う。超常的な力を持っている金属だ。

女勇者は、その剣を、毎日のように女勇者の自慰の道具に使っていたのだ。

影響が出ないほうがおかしい。

剣を抜いた瞬間、その力が開放されていた。

みな、性欲を満たすことしか考えられなくなっていた。

「何でもするって言ったわよね？」

「言いましたな」

「それでは、俺たち一人ずつの好きにされるといふのはどうだ？」

「いいわね」

「決まりだな」

じゃんけんで順番が決まった。

女勇者は、仲間を信用しなかった罪悪感と、剣の魔力で、言いなりになっていた。

一人目は僧侶である。

女勇者を椅子に座らせていた。抵抗できないように、手を後ろに回して縛り、椅子

の足に女勇者の足を縛り付けて動けないようにしていた。そして、目隠しをさせられて

いる。服は着ていない。

僧侶は、勇者の視界がふさがれていることをいいことに、女勇者の座る椅子の周り

をゆっくりと歩いていく。

固い靴の音が周りをゆっくりと動いていく。

自分に触れるのが目的なのだから、それがわかっているだけに、いつ触られるか、

逆にびくびくしてしまう。

そう考えているだけで、旨の先端は固くなり、腹の底に熱い液体が溜まっていく。

「なんと、私が歩いてるだけで感じてしまうのですね」

僧侶は丁寧な口調を使う。女勇者の羞恥心をあおるのだ。

「そんなこと」

小さな声で答えた。

最近では確かに自分の部屋にこもって、毎日のように自慰をしていた。男性器の代わ

りに、剣の柄を中に入れていたのだ。当然、処女である証はとくに取れている。だ

が、人に何かされるといふ経験はほとんどない。そういう意味で、彼女は間違いなく

処女である。

だから、人に何かされようとしている今、体が受け入れる準備をしているのが信じ

られなかった。その信じられないことを受け入れることは、彼女の陥落を意味する。

嘘でも、否定しなくては、どこまでも流されてしまいうさだだった。

「そんなことが何ですか？」

僧侶は女勇者の後ろから手を伸ばすと、胸の上に手のひらを乗せた。先端を含めた

広い部分を軽くさすった。

「さああん！」

女勇者の体が椅子の上で跳ねた。縛られている体はほとんど動かないが、全身にく

まなく力が入った。自分で触れるのとは全く違う感触が、全身を甘くしびれさせる。



触られてもいないのに、足の付け根から、新たに体の中から感じている証が漏れてきていた。

「感じていない？」

僧侶は耳元で、息を吹きかけながら尋ねた。

女勇者の唇が開き、甘く息を吐き出す。

慌てて唇を噛むようにして、口を閉ざす。

「感じしていませんか？」

指を軽く立てた。指の腹を使って、胸を軽くさすって行く。

女勇者の反応を見ながら、少しずつ指を動かして行く。女勇者がいくら頑張っても耐えたとこで、事態は変わらない。辛い時間が少し延びるだけだ。

ぞくぞくと全身の毛が逆立つような感覚が全身に広がる。

目隠しのせいで見えないことが、より感覚を過敏にする。次はどこを触られるんだろうという期待感もある。

と、僧侶が女勇者から離れた。そのまま何もしないで、女勇者を見ている。

女勇者は体をくねらせた。体の中から感じようとしているのに、外からの刺激がなくなってしまったのだ。自分で触れようにも、手は縛られているし、足は閉じることさえできない。何もされていないのに、心臓の鼓動が大きくなっていく。息も、荒くなっていく。

急に僧侶が胸に触れた。

「ああああん」

先程まで感じていた快楽をあっさりと超えるような感覚が、胸に打ち込まれたように広がった。耐えることもできず、大きな声を出してしまった。

「感じていますか？」

先程と同じ質問。

だが、女勇者は同じ答えを返すことができなかった。これ以上、じらされたら、来るってしまうかもしれない。

「感じて、います」

女勇者は認めた。

僧侶はまた、しばらく間を置いた。この体が、じらされることで簡単に感じやすい状態を作り出すことを、僧侶は見抜いている。

「で、どうしてほしい？」

しらしらししく聞く。

女勇者からは見えなかったが、僧侶もズボンの中ではちぎれるのではないかと思えるほど大きくなり、十分に歩く妨げになっていた。そんなことを声には出さずに、女勇者には、あくまで優位な立場でものを言う。

「触って、ください」

僧侶は女勇者の後ろから、髪の毛を触れた。ゆっくりとなぞる。

そのついでのように、耳や首をなでていく。女勇者は耳や首の敏感な肌をなぞられるたびに、体をびくんと跳ねさせた。

しかし、

もちろん、それでは足りない。

「そうでは、なくて」

「ん？ 違いましたか？ でも、感じているようですよ」

肩に指を這わせた。

「あん」

確かにそこも感じる。いや、今なら、どこを触れられても感じるだろう。しかし、

それは、触られている場所の疼きが収まるだけに過ぎない。

もっともっと強い疼きを収めて欲しい。

そう思う。

「胸、触ってください」

恥ずかしくて、一番触れて欲しいところは言えなかった。

「いいでしょう」

僧侶はそのまま後ろから手を伸ばし、両方の胸を軽くつかんだ。

軽く触れられただけなのに、声を出せないと、唇をかんで耐えた。

僧侶は、それぎり手を動かさない。

「もんで、ください」

「いいでしょう」

ゆっくりと揉む。女勇者は首をのけぞらせて、その甘美な感觸を楽しんでいる。

「もっと、強く」

「さきっぽをつまんで」

「もっと、こすって」

注文を色々つけてきた。

自分の手を使えるなら、自分の手でしているところだろう。それができないから、

代わりに自分のやりたいことをやらせているのだ。

僧侶は、思いのまま、胸を揉んだ。

それだけでは、僧侶が飽きてきた。

前に回ると、顔を女勇者の胸にうずめた。顔をやわらかい胸に押し付け、唇で固くなった女勇者の胸の頂を吸った。

派手に女勇者が喘ぐのを聞いて、僧侶は気をよくして続けた。実際、それなりに気持ちよかった。

ますます自分の中で、高まっていくのを感じた。

胸の先端を軽く噛んだ。

「ああああ、それ、だめえ」

一際大きな声を出した。

僧侶はその反応にやりとして、行為を続ける。歯で挟み、挟んだままあごを左右にずらす。固くこつこつした歯で、こすられる感觸は、指や、唇や、舌ともまた違った感觸だった。千切れるのではないかという不安もまた、今は快感に変換されていた。

「あああああああ」

女勇者の大きく体が跳ねた。そのまま、一瞬硬直したかと思うと、全身から力が抜けて、ぐったりと椅子に体を預けた。

それを見て、僧侶は立ち上がった。

「もしかして、イってしまったのですか？」

女勇者は答えない。

肩でする息を必死に抑えようとしているだけだ。

「まだまだ、これから、ですよ」

「まあ、時間なんだけどね」



いつの間にか、女魔法使いが部屋の中に入ってきていた。

「時間！？ まだ、わしゃあ」

「きちんと時間を見てなかったあんたが悪い。ラリホー」

僧侶は簡単に眠った。

「さあ、これから、私の時間だよ」

女魔法使いは、にっこりと笑った。

女勇者は、全く聞いていなかった。

女勇者は椅子から立たされた。それでも、目隠しだけつけられている。

「それを取っては、だ・め」

耳元で色っぽく囁かれて、女勇者は目隠しを取ろうと動かし手を戻した。

ベッドに転がされる。手足は自由に動くが、目隠しを取ってはいけないと言われて、顔付近に手を持っていくことを無意識に禁止していた。足を投げ出し、体が倒れないように、両手を後ろに付いて支えて座っていた。

「この手も動かさしちゃ、だめよ」

簡単な暗示をかけたようだ。女勇者は、自分の意思で大きく体を動かすことができなくなっていた。

「まずは、これから行こうかしら」

女魔法使いは、部屋に色々道具を持ってきていた。

その中から最初に取り出したのは、羽。鳥の羽だ。彼女の手のひらほどもある大きな一枚の羽。柔らかい毛でできた、綺麗な白い羽だ。

そのやわらかい羽を女勇者の体に這わせた。

「ああん、くすぐったい」

女勇者はその感触に驚いて、体をくねらせる。しかし、目隠しのせいで次に触られる場所がわからず、さらに手で後ろに倒れないように支えているので、防ごうとすることもできない。それでも、よほどくすぐったいのか、羽から逃げるように体をくねらせていた。

女魔法使いはそんな様子を見ながら、ゆっくりと羽を這わせていく。わきの下から始まって、太ももやふくらはぎ、肩や首をなぞっていく。丁寧に丁寧に、何かを塗りこみでもするかのようになぞっていく。

「はああ、あ、あうん」

羽が触れるたびに、女勇者は喘いだ。くすぐったいという感覚が少し残っているが、それ以上に官能が強くなっていく。

絶頂を迎えて少し落ち着いていた体に、だんだんと火がついてきていた。それでも、一番敏感ないくつかの部分には近づこうともしない。

女魔法使いの羽が動くたびに、女勇者の体がくねる。そのくねり方が少しずつ変わってきていた。わき腹など、いつもはくすぐったくしか感じない場所も、今は違った。そんな場所ですら、くすぐったさに混ざって、快感がある。首や太ももなどをなぞられると、もう駄目だ。

「ひゃああん」

声を上げて体をくねらす。羽から逃げるように体をひねるのだが、暗示のせいなのか、ただ、もっと味わいたいのかすぐに体を元の無防備な状態に戻す。

その姿にぞくぞくと全身を震わせる女魔法使い。自分の肩を抱いて、震えを抑えよ

うとする。その震えは、今まで焦らしていた女勇者へのいたずらで収める。

女魔法使いは、笑った。

いままで、あえて避けてきた胸を一撫でされた。

「ひゃうう」

火がつきかけた体に、強烈な刺激。その刺激だけで、軽く達してしまう。

「ふふーん、準備は万端ね」

女魔法使いは、羽を後ろに放り投げた。

新たな道具を持ち出す。

軽く手首を使って、壁に先端をたたきつける。空気を切る音と、破裂音に近い衝撃を伴うような音がした。

「うっ」

さすがに武器として使われることもあるものだ。音だけでも、女勇者はその正体を察知できた。

鞭は戦った相手を使ったこともある。だが、その時は、剣も盾も鎧もあったし、なにより、目が見えた。今は、そのすべてがない。自然と手足が縮んだ。

女魔法使いはそんな様子を見て、少しだけ微笑んだ。普通の笑顔だが、状況が状況だけに、少しだけ怖い。

わき腹を軽く叩いた。

「うっ」

軽くといっても、大きな音が立つし、確かに痛い。薄く感じられる。二三日すれば消えるような軽いものだ。

「痛い、やめて」

「うっ」

「もう、やめてよお」

「ああん」

「もう、やめてよお」

一つ一つ、女勇者の反応を見ながら打っていく。

最初打たれたとき、女勇者の体は、緊張していた。しかし、今は違う。肌の色、表情、声、胸の先端や、足の付け根のどこをとってもわかる。

発情。そういえるほど、興奮していた。

女魔法使いも、興奮していた。

普段、男勝りとも言える女勇者が、自分の鞭に打たれて興奮しているのである。普段、戦いになれば魔法を使う魔法使い。実際に鞭などで相手を屈服させるのは、とても興奮した。自分で、服の上から、胸を揉んだり、鞭の柄をスカートの中に隠された足の付け根に押し当ててみたりして、快感を堪能していた。

「ねえ、ここに、鞭を使ってみたいんだぞさあ」

女魔法使いは、鞭の柄を、女勇者の足の付け根に押し当てた。表面の亀裂に沿って当てて、少しだけ動かした。

「そこは」

女勇者は曖昧に答えた。

実際、最初の一撃はとても、怖かった。ただ怖いただけだった。



それが、二回目、三回目になると、どこに当てられるかわからない不安感が期待感に変わり、叩かれる痛みが快楽に変わっていった。

最後に打たれた鞭は、胸で一番敏感な部分を外してはいたが、打たれた瞬間、全身にゆっくりと広がっていくような、痛みと混ざった甘美な感覚があった。そして、痛みはすぐに消え、熱を帯びた快感が打たれた場所から広がっていった。

「そこは？」  
聞き返しながら、女魔法使いは、押し当てた柄をぐいぐいと押し込む。女勇者のそこは、熱い液体でやわらかく開かれた。自分でするときの感触に似たものを押し付けられて、これ以上考えることができなくなっていた。答えることもできない。

「叩いて欲しいの？」  
女魔法使いは、一瞬優しいと思わせるような、ゆったりとした声で、女勇者にたずねる。しかし、その瞬間も、あそこを押す手は緩めない。

「叩いてほしい？」  
「はい」

勢いに押されるように、女勇者が答えた。それを聞いて、女魔法使いは、足に力が入らなくなるほどの快楽を感じた。相手を屈服させたという快楽が、性欲に結びついたのだ。

左手で自分の足の付け根を触る。もう、服の上からでは我慢できずに、パンツをずらして直接指を入れていた。

右手で鞭を振りかぶった。的は小さいが、今なら、この的なら当てる自信があった。狙いをつけて、振り下ろそうとした。

「時間だ」  
いつのまにか、すぐ後ろに戦士が立っていた。女魔法使いは声ではじめてわかった。せめて最後にと鞭を振り下ろそうとする。

しかし、その頭上で何か光った。急速に、女魔法使いの体から力が抜けていった。意識が遠のく。

女魔王使いが最後に感じたのは、眠りの杖を頭上にかかげる戦士が、倒れる自分の体を片手で受け止めたことだった。

「お願い、もう我慢できないの！」  
女勇者は、目隠しを取る事も、自分で慰めることも忘れていた。ほとんど、叫ぶように戦士に言う。もう完全にできあがっていた。

仰向けに寝転び、手は両手とも頭の横に置いていた。足は膝を立てて大きく開いている。腰を少し浮かせて、足の付け根が相手に良く見えるようにしている。

そう、戦士からは、開かれた肉の奥が、うっすらと生えた毛の向こうに見えた。

戦士も、剣の魔力を受けていたし、我慢して時間まで待っていた。そして、この状況である。戦士のものは、これ以上ないくらい力強く天を向き、前垂れを押し上げていた。

驚てるように戦士は身に着けているものを全てを脱ぎ捨てて、女勇者が股を開いているベッドの上上がった。

「いいか？」  
戦士はつぶやくように言った。女勇者が拒むはずはない。

戦士は女勇者に覆いかぶさり、一度だけ唇を合わせた。ほんの一瞬。戦士は起き上

がると、女勇者の足の間に座った。腰を左手で持って、右手で自分のものをつかむ。女勇者の感じてる証でやわらかくなったそこに当てた。

「ああ、それえ」  
当てられただけで達してしまいそうな、快楽を伴う熱がそこにあった。女勇者は、それが中に入ってくるのが待ち遠しく、腰を突き出してくる。

戦士は、それを迎え撃つかのように、ゆっくりと中に押し込んでいった。

「ああ、あ、あ、ああ」  
女勇者は、入ってくるものの熱さに驚いていた。大きさなどわからない。いつも使っている剣の柄が、一般の男と比べて、細いのか太いのか、短いのか長いかわからなかった。だが、今自分の中に入ってきているそれは、とにかく熱かった。

「ひゃあん、すごい」  
戦士は声も出さずに奥まで押し入れていった。あまりの快楽に、女勇者がのけぞっていき。

奥まで入った。少しだけそのまま止めた。

そして、力強く腰を動かし始めた。

女勇者の鍛えた体は、初めての証こそなかったが、かなりの締め付けだった。戦士のそれが大きいというのもあるのだろうが、それでもかなりの締め付けである。戦士は、もう、腰を動かすのを辞めることはできなかった。

しかし、それは女勇者にとってもありがたかった。もう、気が狂いそうな快楽を全身に浴びているのである。体が、もっとも大きな波に向けて登っていくのがわかる。

「だめ、もう、もう」  
女勇者は叫ぶ。起き上がった戦士の上に跨っていた。

「イっちゃううう」  
戦士と女勇者は激しく動いた。

そして、女勇者の動きが止まる。達した。

その瞬間の締め付けはすごいもので、もう少し達するのに時間がかかりそうだった戦士をいとも簡単に屈服させた。熱いほとばしりを、女勇者の一番奥に叩きつけていた。

二人は気を失うほどの快感を感じた。

部屋の中には、眠りに落ちた4人の姿しかなかった。

後日、四人は神竜を倒し、オルテガを復活させる。

女勇者と戦士は結ばれ、正当な愛欲をゾーマを倒したオリハルコンの剣に流し込み、呪われたといってもいいほど、淫らな魔法の剣に仕立て上げていた。

そして、時代は流れる。

勇者がゾーマを倒したのが、はるか昔の伝説としてしか語られなくなった頃。

竜王という悪に立ち向かう、ロトの名を継ぐ者。

竜王を倒すため、勇者ロトが使っていた武器を手に入れる。

すなわち、あの呪われたともいえる剣を。

しかし、それはまた、別の話である。







? ▼

サムライ  
ニンジャ



Priest

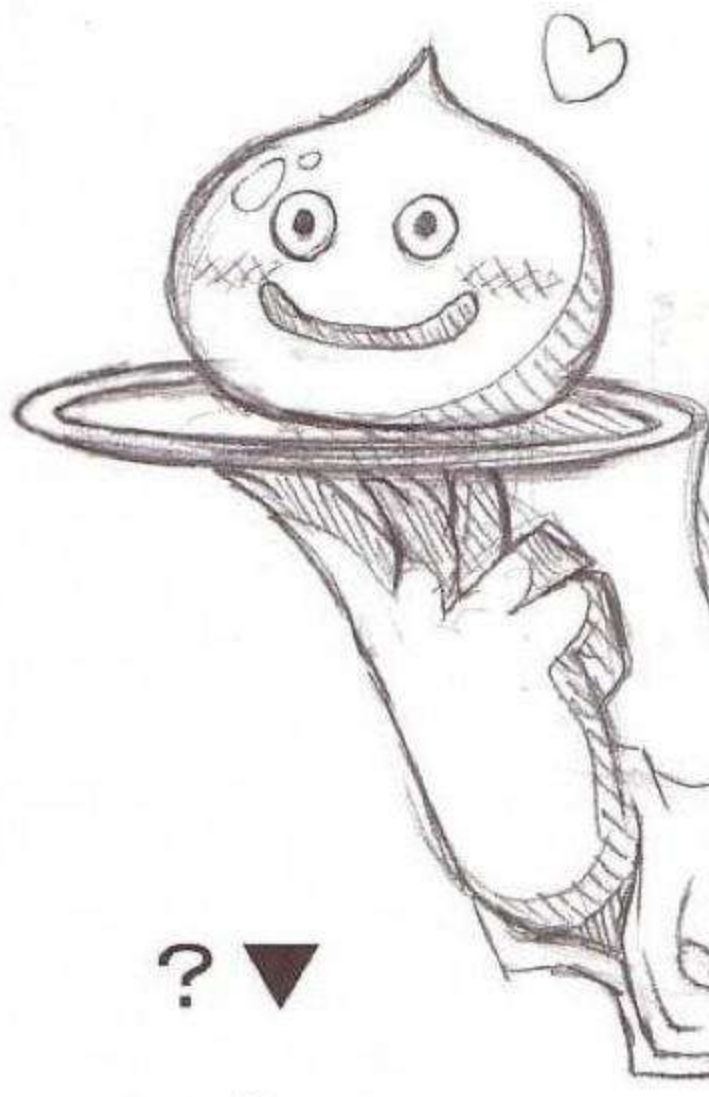
~僧侶~



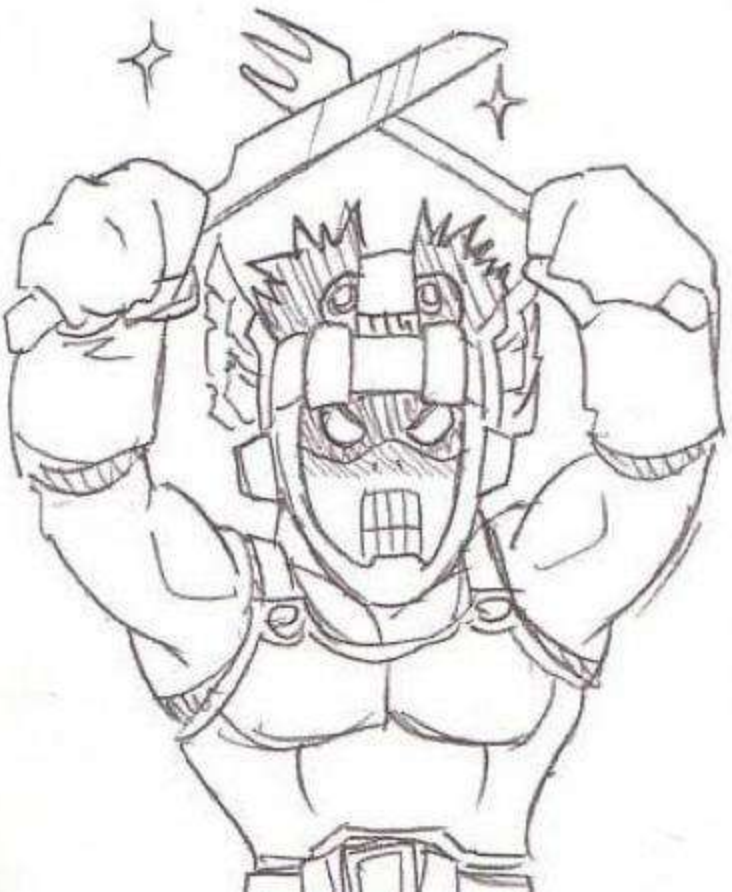
# Jester

～遊び人～

スライム▼



?▼





# げすとこめんと

## ななお さつき さま

今回もお呼びいただき  
ありがとうございました。

ベタなネタでスイマセンでした。  
。(ノ口)

ドラクエの思い出つうと  
予約し損ねてIII買い求めに  
方々彷徨ったことかなー(笑)



「DQM+」打ち切りっぽく  
終わってしまったのが  
とても悔やまれます(泣)  
IIの三人絡みの  
話はとても  
よかったです  
ですが。

2003. June  
七麻” IIIの性格判断は「まけずぎらい」 皐月

## ゆうづき さま



今回も声かけていただきありがとうございます。  
いつもわけわからない最後でスイマセン。(この二人も数R終了って事でした。)  
DQ IIは凄く好きで、特にこの二人が本命です♪  
←この絵が描きたかった(笑)

この二人は描いていて楽しいー。  
戦闘もいつも仲良く二人で戦ってましたヨー。

あと私的にローレシアと  
サマル妹が良い感じだっ  
たりします。(笑)

鳥山明氏のデザインはやはり今見ても  
全然かわいいですねー。

機会があればまた描きたいデス。 2003.5. 夕月

## すみい さま

今回はまたもやお邪魔さしていただきまして、  
右も左もわからんジャンルで妙な漫画描いちゃって  
異様に申し訳ないです。毎回反省ばかり。  
ドラクエという妹の携帯に入っていた  
スライムキャッチャーしかやったことないんですが...  
とりあえずジャンピング土下座から始めたいと思います。

sumy <http://kittyuv.hp.infoseek.co.jp/>



# めいば-こめんと

## みけ

おやった!!おやりましたよーう!  
やった---!カンムリヨウです。  
前回はすいぶん出来が  
こやししかったのですが  
今回は何とかやりあえ  
事が出来ました。  
まだまだ色いろと反省  
ばかりなのですが  
良かったら読んでやって  
くださいませ。

ではでは。

『みけ』

ゲスト様  
あかとう  
ご出ました!!

コレ  
商人



## おのめしん

おかげ様で2冊目のドラクエ本を  
出すことが出来ました~!  
今回も色々てんやわんやだったのですが  
なんとか形にすることが出来て良かったです(汗)  
ドラクエのキャラは妙にエロいというか  
独特の色気があって良いですね。  
Ⅲ以外の作品にも描きたいキャラが目白押しなので  
今後も何かやれたらいいな~と思います。  
この本を手にとっていたいただいた皆様、ゲストの皆様  
ありがとうございました!

オノメシ

oyzはこめんとおやすみです。

ごめんなさい。



# ■おくづけ■

## 絶頂ギガデイン —ドラゴンクエスト 18 禁本—

本書は 18歳未満の方にはご購入いただけません。  
無断転載、複写、複製、  
Webへの転載を禁止します。

発行元 フリークス

発行日 2003年8月17日

印刷所 コーシン出版 / 恒信印刷(株) 様

♡フリークスメンバー  
オノメシン  
猫(みけ)  
OYZ

♡ゲスト様  
sumy  
夕月  
七麻皐月

♡フリークス URL  
<http://momiji.sakura.ne.jp/~freaks/>

♡メールアドレス  
オノメシン→ [doppo-orochi@h2.dion.ne.jp](mailto:doppo-orochi@h2.dion.ne.jp)  
猫(みけ)→ [nekomike2@hotmail.com](mailto:nekomike2@hotmail.com)





presented by FREAKS

絶頂ギガダイ

adults only

